

共同研究

マス・メディアの中の芸術家像

Artists in the Mass Media

松井茂 (IAMAS准教授)、坪井秀人 (国際日本文化研究センター教授)
MATSUI Shigeru (IAMAS), TSUBOI Hideto (International Research Center for Japanese Studies)

研究概要

2019年度、国際日本文化研究センターの共同研究プロジェクトに採択され、「マス・メディアの中の芸術家像」を実施した。

本研究は、第2次世界大戦後のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術（美術、音楽、文学、建築、思想など）を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディア（放送文化と出版文化）を介してはかれる領域横断は、芸術家相互の新たなネットワークを生成することで、旧来の制度化された芸術諸分野を解体してきた。例えば、美術館、コンサートホール、文芸誌に固定化した作家や作品が、テレビ番組、総合雑誌、新聞に流通することで、情報であることを前景化してきた。こうした状況において、現代芸術は、抵抗文化としてのラディカルな戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。

研究対象とする時代区分は、テレビがほぼ100%普及した1968年からインターネット元年と言われる1995年とする。オールド・メディア成熟期を分析対象とすることは、ニュー・メディア成熟期を迎える現在の批判理論の基礎となる。

実施状況

2019年度、研究会を5回開催した。本紀要に、研究会第1回（5月13、14日）に実施した坂本龍一氏のインタビュー、第1回、第2回（7月14、15日）レポートを掲載する。それ以後の研究会についても今後レポートを取りまとめる予定。

第3回（9月29、30日）は、松井による1984、85年の磯崎新の出版活動について。鈴木勝雄による高橋悠治と水牛楽団について。服部真史による磯崎新の海外からの評価について。佐藤による浅田彰と現代にいたる現代思想の展開について。

第4回（12月26、27日）は、前田真二郎による映像表現とメディア技術の展開について。ゲストとして招聘したケン・ヨンダ (UCマーセド) に依頼した、1980年代のフェミニズムと戦後日本美術の思想的分析。坪井による寺山修司の文学外への横断的な活動について。

第5回（2月9、10日）は、伊村靖子による戦後日本美術と文化シーンの接点として、無印良品の批評的分析。研究会のメンバーに当事者を含む「湾岸戦争論」（1991～93年）の再論として、坪井と藤井貞和の発表、ゲストとして瀬尾育生を招聘した。

研究代表者

松井茂、坪井秀人

共同研究員

前田真二郎 (IAMAS教授)、伊村靖子 (IAMAS講師)、佐藤知久 (京都市立芸術大学 芸術資源研究センター教授)、原久子 (大阪電気通信大学総合情報学部教授)、中西博之 (国立国際美術館主任研究員)、川崎弘二 (相愛大学音楽学部非常勤講師)、長寛寛幸 (東京藝術大学大学院映像研究科教授)、外山紀久子 (埼玉大学大学院人文社会科学部研究科教授)、藤井貞和 (東京大学名誉教授)、鈴木勝雄 (東京国立近代美術館・主任研究員)、渡部葉子 (慶應義塾大学アート・センター教授)、本間友 (慶應義塾大学ミュージアム・commons専任講師)、服部真史 (株式会社新建築社・編集者)、岡田暁生 (京都大学人文科学研究所教授)